

能《大江山》と「大江山絵詞」

小林 健 二

要 旨 劇中に登場する独武者の素性を解明する作業を通して、能《大江山》が酒吞童子諸本の中でも香取本「大江山絵詞」に拠って作られていることを確認し、その独武者が能《土蜘蛛》にも登場することから、能の世界で頼光物として連作されたことを考証した。さらに、「大江山絵詞」絵巻は室町將軍のもとで作成され、その周辺に伺候していた観世座の者によつて《大江山》が作劇された可能性について考察した。

鬼神退治の一行

現在でも人気のある鬼退治物の能に《大江山》がある。これは、ご存じのごとく源頼光一行が大江山の鬼神である酒吞童子を退治する物語を劇化したものである。頼光は郎等を引き連れて酒吞童子の住み処である大江山に向かうが、その中に以前より気になる人物がいた。まずは一行の面々がいかに描かれるか、ワキ・ワキツレ登場の段を見ることにしよう。⁽¹⁾

〈頼カ、ル〉扱も此度御門の宣旨には丹波の国。大江山の鬼神の事。うらかたの言葉に任つゝ。頼光保昌に仰付らる〈供〉よりみつやすまき申様。たとひ大せいありとても。人りんならぬ化生の物。いつくをさかひに責へきそ〈頼〉おもふ子細のさうらうとて。山伏のすかたに出立ちて〈供下〉かふとにかはるときんをき〈頼下〉よろひにあらぬす、かけや〈トモ〉兵具にたひするおひをおひ〈頼〉其出立は行者なれ共其ぬしくは頼光保昌〈共〉さたみつすゑたけ綱きんとき〈ヒトリ武〉また名を得たる独武者〈供〉かれこれ以上五十余人。また夜のうちに〈頼〉有明の。……

右のように、頼光と保昌を大将として、郎等に頼光の四天王である貞光・季武・綱・公時の四人と、その他に傍線で示した、独武者という聞き慣れない人物が交じっている。しかも、この独武者は「また名を得たる独武者」と保昌や四天王を差し置いて単独で謡うのである。この人物は、後場の酒吞童子を退治する段でも活躍を見せる。

〈頼〉かくて此夜も更行は。空猶くらき鬼の城。くろかねのとひらをしひらきつゝ。みれはふしきや今迄は。人のかたちと見えつるか〈同〉其たけ二丈はかりなる。く鬼神のよそほひのねふれるたにもいきほひの。あ

たりをはらふ気色哉。兼て期したる事なれば。とても命は君の為。又は神国氏社。南無や八幡山王権現我らに力をそへ給へと頼光保昌つなきんとき。さたみつすゑたけ独武者。心をひとつにして。まともみ伏たる鬼の上に剣をとほする光のかけ。いなつましんとう。おひた、し〈鬼〉、情なしとよ客僧達偽あらしと云つるに鬼神に横道。なき物を〈ヒトリ武者〉、何鬼神にわうたうなしとや〈鬼〉、中々の事〈ヒトリ〉、あふ偽なりなどさらは。王地に住て人を取。代のさまたけとは成ぬらん〈詞〉我をは音にも聞つらん。保昌の御内にひとり武者。鬼神なりとのかすまし。ましてや是は勅命なれば〈カ、ル〉土も木も。我大君の国なれば。いつくか鬼の宿り成へき。あますなもらすな責よや責よや人々とて。きつさきを揃切てかゝる。

鬼神退治の一行は、七人全員で鬼神と化したシテの童子に斬り掛かるが、童子が「情なしとよ客僧達偽あらしと云つるに鬼神に横道。なき物を」と頼光達の裏切りをなじると、ワキツレの独武者が傍線部のように鬼のなす事の非道を説いて応酬し、さらに「我をは音にも聞つらん。保昌の御内にひとり武者。鬼神なりとのかすまし……」と堂々と名乗り、四天王はおろかワキの頼光にも負けないような活躍を見せるのである。

独武者は、このように自ら「名を得たる（登場の段）」または「音にも聞きつらん（退治の段）」と名乗り、能の中では一際目立つ存在なのであるが、これまでは典拠である酒吞童子物語の諸本に登場しない人物とされ、その素性は不明とされてきた。

例えば、古法眼本と呼ばれるサントリー美術館蔵「酒傳童子絵巻」は、後の酒吞童子物語諸本に大きな影響を与えた絵巻であるが、⁽²⁾

されは神明も是を加護し給ふ、天魔も恐れへし、宣旨を蒙、向所の敵を滅さすといふ事なし、古も今も有かたき武将也と申されければ、諸家皆々同心して、頼光を召れけり、頼光、赤地の錦の直垂に、小具足はかりにて、

四天王の者とも、綱・公時・貞光・末武、召具して、南殿へそ参られける〔中略〕

さる程に、頼光の給けるは、存する旨あり、大勢にて入へからず、汝はかり召具すへし、其外は保昌をかたらふへし、都合六人、各々面々に出立て、おいを一丁つ、かけたり……

と、鬼神退治の宣旨が下るのは源頼光一人にである。そして、頼光はまず四天王を召し具し、さらに保昌を加えて一行を六人として出で立つのであり、独武者は登場しない。この人数はその後の酒吞童子物語諸本で変わることがなく、時代は下がるが、江戸中期に渋川版御伽文庫二十三編に所収されて流布した「酒吞童子」では、⁽³⁾

またらくわうがらうどうに、さだみつ・すゑたけ・きんとき・つな・ほうしやう、いづれもぶんぶにだうのつはものなり。これら六人の者どもこそ、心にかかり候ふなり。

と鬼神退治の一行は六人であって、保昌は頼光の郎等に格下げされ、独武者の名前は見えない。

江戸時代の狂句集『日本史伝川柳狂句』には「酒吞童子」を歌った一連の作品があるが、その一つに「山入りは似たりよつたり強い人」という句がある。⁽⁴⁾「似たりよつたり」は「二人四人」の語呂合せで、計六人という意味である。つまり、勅命を奉じて鬼神退治に発向する大江山鬼神退治の一行の人数は六人、というのが一般的な理解だったことが知られよう。

酒吞童子物語は絵巻・絵本で伝えられることが多いので、ここで挿絵に描かれた鬼神退治の一行も見えておこう。古法眼本の鬼神退治の一行が、神々の化身に導かれて大江山に分け入る場面〔図1〕を見ると、神達が三人と頼光をはじめとする笈を背負った山伏姿の六人が認められる。同じ場面を御伽文庫本〔図2〕で見えてみるとほぼ同じ構図であり、やはり三神の化身と六人の山伏姿が描かれている。このように酒吞童子物語の世界では鬼神退治の一行は六人というのが、挿絵の中でも確認できるのである。

それに対して能では先に見たように「頼光・保昌・貞光・季武・綱・公時また名を得たる独武者」とあるから、頼光と保昌の二人を大将としてそれに家来が五人の全部で七人ということになるが、酒吞童子物語諸本の中で能と同じく七人とする伝本がある。逸翁美術館蔵のいわゆる香取本「大江山絵詞」がそれである。香取本では、⁽³⁾

撰津守頼光、丹後守保昌等に、仰せられて、めさるへき由を申されければ、諸卿一同して、両将をめされぬ
……両将宣旨を給はりて、鬼城へ尋ね向かひ給由を伝へ承る間〔中略〕

二人の將軍、五人の兵、同心に、鬼の頸を打落つ、此鬼王の頸、天に飛登て、叫廻る事、おひた、しと、鬼退治の一行を頼光と保昌の二人を大将として、さらに郎等の五人を加えた七人であるとする。このように頼光と保昌を両大将とし、一行を七人とするのは、他本と異なっており、能との共通性から注目すべきことなのであるが、残念ながら現存する香取本の詞書には独武者の名前は見られないのである。

ところで、酒吞童子物語は、絵巻・絵本など多くの諸本が存し、早くから系統の整理が試みられていた。松本隆信氏は童子の住み処を大江山とするか伊吹山とするかで系統を大きく分けられたが、⁽⁶⁾現在ではそんなに単純に分類できないことが論じられている。現存最古の伝本は、南北朝頃制作とされる逸翁美術館蔵の「大江山絵詞」（重要文化財）で、香取神社大宮司家に伝来していたことから香取本と呼ばれ、大江山系の本文を持つ。一方、伊吹山系の伝本としては、サントリー美術館蔵の狩野元信画「酒傳童子絵巻」三軸がその代表格で古法眼本と称される。諸本は本文・挿絵ともに異同が大きい⁽⁷⁾が、根源に香取本が存し、次に位置する古法眼本を経て多岐に流布したとするのが今日の定説となっている。古法眼本がそれ以降の諸本に直接の影響関係を持つているのに対して、香取本は孤立した存在と言えよう。能はその香取本と一番近い関係にあることがこれまで種々に指摘されているが、⁽⁸⁾鬼神退治の一行もその数を同じくしているのである。

独武者の素性

能に登場する独武者がどんな人物であるかは、色々と人々の興味を引いたようである。たとえば昭和四十一年雑誌『観世』誌上で行われた能《大江山》をめぐる座談会でも、この人物が次のように話題となっている。

香西（精）

独武者とありますが、あれはどういうことなのですか？

杉浦（義朗）

その人物はいつも話題になるん

ですがわからないですよ。一番力のある人を独武者といっているんでしょう。寿岳章子 土蜘蛛にも出てまいりますね。頼光の身内の方では？ 香西

それだけ名前が出てこないなんて、お能の方では重要な役割をしているのに（笑）。どなたの説だったかなあ、「独」は「火をとる人」で夜ろうそくをたてる人、火の番をする人

か。また一方では、四天王がいてもう一人重要な人がいたという説もありますね。……

座談会のメンバーの香西精氏は世阿弥を中心とした能楽研究の第一人者であり、寿岳章子氏は国語学者で随筆家、杉浦義朗氏は観世流の能役者である。この三人の話からも知られるように、独武者は素性不明というのがこれまでの実情であった。

ちなみに、辞典類で「独武者」をみると、『日本国語大辞典』では、「他に肩を並べる者のない強い武士。ひとりすぐれていて強い武者」とあって、謡曲《土蜘蛛》と謡曲の影響作である浄瑠璃「傾城酒吞童子」の例を引いている。さらに、角川書店の『古語大辞典』では、「大勢の中で一人だけぬきんで強い武者。一騎当千の意からの称か」とあり、やはり謡曲《土蜘蛛》の例を引き、また、第二の意味として、「浄瑠璃・歌舞伎などに登場する人物名。源頼光の家来の一人、平井保昌をいう。渡辺綱・坂田金時・碓井貞光・卜部季武の四人を四天王と称し、それと対

にして、「四天王独武者」という用い方が多い」として「頼光跡日論」や「源平雷伝記」の浄瑠璃の例を引いている。近世演劇の世界では、独武者は保昌と理解されていたようである。なお、『時代別国語辞典 室町時代編』には見出し語として取り上げられていない。

一方、謡曲の注釈書類を見ると、『謡抄』『謡曲拾葉抄』には、『大江山』は取り上げられず、寛政年間に佐久間寛臺によって著された浩瀚な謡曲注釈書である『謡言粗志』に「……世ニ云独武者ハ平井保昌也ト云リ」と独武者は保昌であると理解を示すものの、さらに「又此謡ニモ保昌ノ外ニ独武者アリ其家名等ヲ考ズ」と保昌の他に独武者がいたという解釈も記している。近代に刊行された謡曲集では、佐成謙太郎氏が『謡曲大観』の頭注で「その姓名は分からない。本曲に「保昌の館に独武者」といつてゐる。即ち頼光と保昌とがそれ〴〵勇武な家来を連れて鬼神退治に出掛けたのである」と保昌の家来であると推測されている⁽¹⁰⁾。

以上、色々と上げてみたが、これまでは独武者の素性は明らかでなく、能の世界の中で創られた人物像のように漠然と考えられていたのである。

「酒天童子物語絵詞」の独武者

ところで、陽明文庫に所蔵される「酒天童子物語絵詞」は、つとに佐竹昭広氏が書中に触れられ、榊原悟氏によつて全文が紹介されたものであるが⁽¹²⁾、香取本の巻頭部分の詞書を室町後期に転写した資料で、現存本の詞章を補える貴重な資料である。その鬼神退治の一行が助勢の神達に導かれて山中に分け入る場面に、

山臥・老僧・若僧・綱・公時□□□□□□武・独武者など九人は九ちやう□をいにかけて白翁と頼光は先達のこ

とくに檜杖といふ物をつきてあゆみつ、きける……

とあるのが注目される。明らかに鬼退治の一行に「独武者」と見え、現存本の詞書で欠けている部分に独武者の名があったことが認められるのである。この転写本の本文によると鬼退治の一行は全部で十一人。その内訳は、神様が八幡・住吉・熊野・山王の四神と、頼光・保昌の両將軍、そして、郎等の四天王と独武者と言ふことになる。

香取本も絵巻であるからその挿絵で検証すると、神々と退治の一行が揃って描かれる場面が少ないので、なかなか検証しづらいのであるが、頼光一行が大江山に入った時に、四人の神が出迎える場面【図3】を見ると、人物の構成が確認できる。神の化身四人と、鍬形をうった立派な甲を被った頼光と保昌の両將、それに五人の武者が描かれるが、下方に一人離れて座っているのが独武者なのであろう。このように香取本に独武者が登場していたことは、挿絵の図柄からも認められるのである。

さらに、「酒吞童子物語絵詞」では、鬼退治の一行について次のように詳しく記す。

頼□□□□綱・公時・貞通・季武四人□□□□主従共に五騎也。保昌の□□□□幸小監ばかりなり

鼠害による欠損部分があるものの、これは、頼光が綱・公時・貞通（光）、季武の四人の家来を連れて主従五騎であったのに、保昌の郎等は傍線部のように一人だけだったと解釈できよう。つまり、四天王に対して一人であったのだ。独武者という名称はそこに起因しているのだと考えられる。そして、その保昌家来の独武者は上の字が欠けるが「太宰少監」であったと読めるのである。

実はこの保昌の郎等である太宰少監は説話の世界に見える人物で、『古事談』巻第二―五十七に次のように登場する。¹³⁾

頼光朝臣四天王等を遣はして、清監を打たしむる時、清少納言同宿にてありけるが、法師に似たるに依りて殺

さんと欲ふ間、尼為る由云ひえんとて忽ちに開を出だす、と云々。

右のように、頼光が四天王を派遣して清監を殺害したと言う事件が語られる。その時に同宿していた清少納言が、法師に似ているので殺されそうになったところ、女性の秘部を見せて尼であることを証明し、難を逃れたという生々しい話である。清監とは清原元輔の男致信のこと。太宰少監（三等官、従六位上相当）であつたことによる称で、清少納言の実兄である。この頃、清少納言は五十歳ほどで、能因本「枕草子」によると尼になり阿波の乳母子をたよつて諸国を流浪したというが、この時は都に居る兄を頼つて同宿していたのだらう。⁽¹⁴⁾

この話は、清監が討たれたことよりも、清少納言が女性器を露わにして難を逃れたという、その零落した姿に興味を持たれ語り継がれたのであろうが、独武者の正体を追う筆者としては、その手掛かりを得られることがありがたい。『御堂関白記』寛仁元年（一〇一七）三月十一日の条には、さらに詳しく清監暗殺の件が記される。⁽¹⁵⁾

庚戌、右衛門督来云、行幸申時許六角小路与福小路（富小路カ）侍小宅清原致信云者侍介り、是保昌朝臣郎等、而乗馬兵七八騎・歩者十余人許圍来殺害了、遺檢非違使等、令日記如此、見之秦氏元子申有此中由、頼親朝臣相従者々、仍問案内、頼親所為、人々広云、件頼親殺人上手也、度々有此事、是被害大和国為頼云者阿党云々、

右衛門督（藤原頼宗。道長男。従二位權中納言右衛門督兼檢非違使別当、当時二十五歳）の語るところによると、致信は藤原保昌の郎党であり、ここにおいて清原致信、すなわち清監（太宰少監）が保昌の家来であつたことが明らかになる。致信を殺したのは源頼親の手者で、乗馬の七、八騎、歩者十余人が押し寄せて致信邸（六角富小路）を囲んだという。それ以前に、頼光と頼親の威勢を借りていた左馬充当麻為頼が保昌の手者によつて殺されたらしく、その報復だという。⁽¹⁶⁾ 頼親は頼光の弟で、「殺人上手」と語られている。なお、『今昔物語集』二十五―八の

「源頼親朝臣令罰清原□□語」は、題名だけが残る本文欠話であるが、殺害を命じたのが頼光ではなく頼親とすることから、より実話に近い内容の話であったかと思われる。

この事件は『扶桑略記』後一条天皇、長和六年〔寛仁元年〕の条にも、⁽¹⁷⁾

三月八日丁未。行幸石清水神宮。寄献封戸百烟。是日。前太宰少監清原清信〔清、恐当拠下文作致〕。日昼被殺。前大和守藤原保昌郎侗也。

とあり、前の太宰少監である清原致信が白昼に殺されたが、前の大和守藤原保昌の郎党だと記されており、太宰少監が保昌の家来であることが認められるのである。

さて、この説話にも語られた血なまぐさい事件であるが、事実は『御堂関白記』にある通り、頼親が手の者を使つて致信を殺したのだらう。それが、『古事談』では源頼光が四天王を遣わして清監を成敗したというように変貌していることに注意したい。ここにこの事件の説話化が窺えよう。殺された清監は藤原保昌の家来であった。そこから主謀者が武家の世界で保昌と並び称される頼光にすり替わったのであり、保昌の家来である清監、すなわち太宰少監清原致信に手を下す者も頼光の郎等である四天王であった、というような話の改変が説話世界の中でなされたことが窺えるのである。これが香取本における酒吞童子退治の四天王に対する一人武者の構図に繋がってくるのである。

ともあれ、これまで述べてきた素性不明の独武者は、能の世界で創造された人物ではなく、典拠とした香取本『大江山絵詞』にすでにあったキャラクターであることが認められよう。そして、このことは、能《大江山》が、多くある酒吞童子物語の諸本の中から香取本に拠つて作られたことを、あらためて補強する材料ともなるのである。

ところで、この独り武者は、中京大学図書館蔵「しゆてんとうしの物語」(以下、中京本と略称)にも其の名が見える。この資料は近年紹介された室町後期の書写とされる絵本改装絵巻で、香取本の影響も窺わせる注目すべき伝本である。その独武者が書中に現れるのは二回、まずは酒呑童子の住処での酒宴の場面をあげよう。⁽¹⁸⁾

らくくわうさかつきをとりあけ、たふくとうけほすていにて、さつとすて、ほうしやうのひとりむしや、けこて候と申、もとよりつなハめいしんなり、たふくと三とほし、それよりしたいにさしくたし、さかつきとかくすきぬ

童子が山伏に変装した頼光一行に血の酒の盃を勧めると、まず頼光が飲む振りをして捨て、次ぎに受けるのが「ほうしやうのひとりむしや」なのである。さらに、盃事が終わつたあとでもう一度登場してくる。

とくのさけを、したいくにあひぬれハ、これなるきやくそを、よくく見申は、たゝいまそれかし御物かたり申つる、らくくわうにてハましまさぬか、そのつきハ、ほうしやうのひとりむしや、そのつきハ、ひらきかてをきつたる、くせものつな、すゑ(たけ)、三人らうとうとも、いつとうあやしやと、ことのほかにいろめいたり

と、童子が目の前に並ぶ客僧達が噂をしていた頼光一行ではないかと怪しむ場面であるが、ここでも頼光の次ぎに「ほうしやうのひとりむしや」が出てくるのであり、注目されるのである。ここで中京本の鬼神退治の一行が何人であるかを検証してみたい。中京本で鬼神退治の宣旨を受けるのは頼光だけであり、大江山の鬼神の住処に向かう一行を、

かくて三人のおきな、ミちしるへをめされけり、い上九人の人々、いそかせたまひけるほとに、

と、神の化身三人と武士六人の合わせて九人とする。このことから、「ほうしやうのひとりむしや」の「の」は、

所有・所属を示すのではなく、同格を意味する格助詞であり、従って、保昌と別人を示すのではなく、保昌自身のことを指していると考えられよう。つまり、香取本のように保昌の家来、つまり別人格を示したものではないということになる。このことは挿絵の図柄からも窺える。古法眼本や御伽文庫本と同じ場面【図4】をあげるが、神が三人、山伏が六人で、古法眼本や御伽文庫本と同じく合計九人で、独武者がいなかったことが図柄の上からも認められよう。

これらのことから、中京本で「ほうしやうのひとりむしや」とあるのは、中京本が香取本系統の本文の痕跡をとどめながらも、独武者を保昌と解釈しているのであり、後の近世演劇の世界と同様に、物語草子の中では独武者が保昌と同化していく様相が窺えるのである。ところが、能の世界ではこの独武者が生き続ける。《土蜘蛛》がそれである。

頼光物の能の展開——《土蜘蛛》

能《土蜘蛛》は室町期の演能記録はないが、室町末の能作者付である「いろは作者註文」に「つちくも」と曲名が見え、また金春三郎（禪鳳）等が節付した天正頃書写の野坂家藏謡本に「蜘蛛」と題して収められることから、室町後期にはあった能であることが知られる。

これは、土蜘蛛の精が七尺ばかりの僧になって頼光を襲い、逆に斬りつけられて逃げたところを頼光の郎等によって追い詰められ、本性を現したところを退治されるといった筋立てである。その顛末を典拠となった『平家物語』の「剣の巻」では次のように描く。¹⁹⁾

同キ季ノ夏ノ比、頼光瘡病ヲシテ、ヲトセドモ落ズ、加持スレドモ不叶、後ニハ毎日ニヲコリケリ。発リヌレバ頭打（痛）、身ホトヲリテ、天ニモ地ニモ不付、中ニ浮レテ悩ミケリ。発テ二時斗リ大事ニテ、暫シホトヲリサメテ頭ノ打ナリ、加様ニシテヲコル事、三十余日ゾ有ケル。或時、又大事ニ発テ、二時斗アリケルガ、少シ験ニツイテサメガタニナリケレバ、四天王ドモカン病シケルガ、打ステ、閑所ニ入テ休ケリ。頼光ホトヲリ覺タリケレドモ、能クモ立テナラズ、夜打チ深テノ事ナレバ、燈ヲマボラヘテ、世間ノ事ドモ案ジ連ネテ臥タルニ、燈ノ影ヨリ、長七尺計ナル法師ノスル々々ト歩出テ、索ヲサイテ（サバキテイ）頼光ニツケントス。頼光此ニ驚テガバト起テ、何者ナレバ頼光ニ索ヲツケントスルゾ、ニクキ奴哉トテ、枕ニ立並タル膝丸ヲ取テフツト切ル。手答シケレバ、四天王ドモ走来リテ、何事ニヤト申ケレバ、シカ々々ト語りケレバ、サテハ不思議ナリトテ、燈台ノ下ヲ見レバ、実ニ血コボレタリ。手々ニ火ヲトボシテ見レバ、妻戸ヨリ出テ簀子ヘ下タルガ、簀子ニモ血コボレタリ。臙テ門ヘ出タルガ、長道計ヲ引テ北野ヘ血コボレタリ。アトメニツキテ尋行ニ、北野ノ中ニ大ナル塚穴アリ。彼ノ塚ノ穴ノ内ヘ入タリケレバ、則チ塚穴ヲ崩テ見ケル程ニ、四天王差繩ヲ持縛ケルニ、四尺ノ繩ハタラヌ程ニ大キナル山蜘蛛ニテゾアリケル。縛テ参リタリケレバ、安カラヌ事ナリ、頼光ホドノ者ガ是程ノ奴ニ誑ラカサレテ、三十余日マデ悩ニケルコソ不思議ナレ、傍輩向後ノタメニトテ、鉄ノ串ニサシテ川原ニ立テゾ曝シケル。膝丸ヲバ蜘蛛切テノ後、改名ヲ蜘蛛切トゾ名付ケラル。

傍線部のように、頼光を看病し、その危機に駆け付け、そして土蜘蛛を追い詰め捕縛する役をすべて四天王とする。それに対して《土蜘蛛》では、病に伏せた源頼光（シテヅレ）を僧に化した土蜘蛛（シテ）が襲ったのを、頼光が退ける場面で⁽²⁰⁾

（ワキ）御（ご）ゑのたかく聞え候にみなくよせさんして候

と、頼光のもとに馳せ参じるワキは独武者であり、四天王は登場しない。さらに、

(ワキ) 言語道断 いまにはしめぬ君の御威光つるきのいとくかた／＼もつて近頃めてたき御事にて候 又御太刀つけのあとを見申に けしからす血なかれて候。かのちをたんたへ。けしやうのものをたひち仕 やかてまいらふするにて候

と化生の物の退治に先頭に立つのもワキの独武者である。そして彼は土蜘蛛を追い詰めて、次のように名乗る。

(ワキ) 其時独武者 彼塚にむかつて大音あげていふやう。これはをとにも聞つらん。頼光の御内にその名をえたる独武者。いかなる天魔鬼神なりとも。みやうこんをた、ん此塚を (地) くつせや／＼つはものと よははりさけふその声に。ちからをえたるはかりなり。

右のように、独武者はその主を保昌から頼光に替えて、郎等の先頭に立つて土蜘蛛退治に活躍するのである。これは、能の《大江山》の独武者を踏まえて造型された人物設定と考えられよう。この話は、慶応義塾大学図書館蔵の江戸前期頃書写『土ぐも』⁽²¹⁾ 絵巻二軸にも載るが、そこでは土蜘蛛を退治するのは、四天王となっているから、絵巻から能への直接の関係は考えられない。むしろ、この絵巻は能を物語草子として再生する際に、土蜘蛛退治に活躍する郎等を「剣の巻」にあるような伝統的なキャラクターである四天王にすり替えたと考えられ、逆に言えば、能の世界の中で、独武者のキャラクターが継承されていく様相を見ることができるのである。

以上、独武者の素性を洗い出す作業から、《大江山》《土蜘蛛》と能が連作される経緯を考察してみた。《大江山》から《土蜘蛛》へと言う一連の頼光物を作っていく、能の世界での系譜が見えてこよう。⁽²²⁾

能《大江山》成立の場

能《大江山》は、鬼退治物という内容から、これまではそれほど古い能とは考えられていなかった。ところが、近年、応永三十四年（一四二七）に行われた大乘院別当坊猿樂における能番組が紹介され、その中に《酒天童子》の曲名があったことから、俄然、古曲として注目されることとなった。この時は観世座傍系の役者である十二次郎による演能だったのだが、世阿弥が存生していた時代に、観世座で《酒天童子》が演じられていたことは、能楽研究の世界に少なからぬ衝撃を与えたのである。

この《酒天童子》を鬼退治物ではなく、夢幻能の《幽霊酒天童子》と見る向きもあるが、それはこの能に古い演能記録がなかったことが影響していると思われる。しかし、文明十年の宇都宮二荒山神社の神事能番組や、室町末期ではあるが天正十一年の丹後細川能番組のように、室町期における演能記録があることから、応永三十四年の《酒天童子》は現行《大江山》と同じ鬼退治物であったと考えてよいであろう。

《大江山（酒天童子）》は『能本作者注文』『自家伝抄』の作者付や、永正頃の装束付けとされる『舞芸六輪次第』にも記載が見られ、永正頃の歌謡集である『閑吟集』にも謡の一部が採られていることなど、古曲であることは疑いがない。

この、応永三十四年の《酒天童子》が十二次郎によって演じられているのも興味深いことである。それは、『申楽談儀』の大和猿樂十二座の統率者、五郎康次（十二次郎の父）の書状の中に、十二五郎が「世子一言によりて、鬼を（碎動を（※書き入れ）得てせし者也」とあるからである。つまり、世阿弥のアドバイスによって鬼の能を得意としていたことがわかり、また、「身のため、得手向きの能あまた御書き候て、仕置きて候」ともあることから、

世阿弥に得意な能（つまり鬼能）を沢山作ってもらい、それを演じていたことが知られるからである。すなわち、その息子である十二次郎がここで演じた《酒天童子》も、その作の一つであった可能性があり得なくもないのである。たとえば世阿弥の可能性は薄くとも、この時代の観世座の誰かの作ということになるであろう。

ところで、この能が作られた場を推測する手掛かりとなる記事が、最近、落合博志氏によって報告された。

《大江山》【前場】の酒宴の場面には、⁽²⁷⁾

（シテカ、ル）あわれみ給へ神だにも（同音）一兒二山王と立給ふは、神をさぐる由ぞかし。

というシテの童子の文句が見える。これは、稚児を第一とし、山王の神を第二とするのは、稚児が髪の毛を下げているからで、従って、神は稚児の下にあるのだ、という言葉遊びであるが、これは『溪風拾葉集』に、⁽²⁸⁾

山門記録説曰。高祖大師最初登山之時。二人化人値給。先現天童。次山王影向給。故一兒二山王云也。……因

物語云。山門延年時。秀口兒髮サカリタレバ。一兒二山王申也。

とあって、叡山の法師達には知られた秀句話だったようである。

ところが、落合氏が紹介された、明応十年（二五〇一）成立の尊舜の著した『二帖御抄見聞』には、⁽²⁹⁾

近比普光院殿ノ御時。東塔東谷花芳院慶憲法印ヲ召シテ御雑談ノ次ニ。「一兒二山王ト者如何ト御尋在之。其時慶憲不及私案廳テ髮ヲ下タル故ニト被タリ申。於殿中二人々聞キ之ゲニモ也ト皆被称歎セ。実ニ末代ノ名譽也。」

という記事があり、この秀句話が、俄然、《大江山》の能が作られる場に関連して注目されることとなった。落合氏は次のように説かれる。⁽³⁰⁾

想像を巡らせれば、ある時義持の御前で証憲の披露した「一兒二山王」の秀句的解釈が評判となり、《大江山》

の作者によつて詞章に採り入れられた、という事情であつたかも知れない。もつとも、『溪嵐拾葉集』によれば山門の延年の秀句芸で言われていたこともあつたようだし、全く別の経路から《大江山》の作者の耳に入つた可能性も否定できないが、將軍を初め伺候の人々が「ゲニモ也トテ皆被称歎セ」というのを信ずれば、広くは知られていなかったようであり、少なくとも《大江山》が義持の周辺で作られたとすれば理解しやすいと言えるであらう。

右のように考証されているのは、《大江山》が観世座の誰かによつて作られたことを考え合わせると、たいへん示唆的である。酒宴の場面でこの「一児二山王」のエピソードが語られる前には、酒天童子の命名の由来や、童子が叡山を追われて大江山に居着いた経緯などが語られるが、それは図らずも伝教大師最澄の叡山開闢譚ともなっており、香取本にだけそれが見えることから、能は香取本より取材したとの一つの根拠となつていた。しかし、この「一児二山王」の秀句譚は香取本には見られないもので、あるいは、能の作者が、《大江山》を構想中に將軍の周辺でこの秀句の場面に出くわしたか、またはその評判を聞いて加えたエピソードとも考えられよう。これは、能が作られる場の問題としてもきわめて重要なことである。

これまで、《大江山》は、酒吞童子の物語が素材であるとされ、さらに多くある物語諸本を絞つて香取本が典拠であろうと目されてきたが、能作者が物語をどういう場で享受し、能として作つたか、つまり能の制作の場については、論じられてこなかった。視点を変え、香取本の伝来や流布についても考証されていなかったと言えるだろう。香取本が享受されていた痕跡が記録上に見られないこと、また後の諸本への直接の影響関係が希薄なことからも、この本が一般に流布していたとは到底考えられない。その所有者や眼にした者は一体どのような人々であつたのか。これは、酒天童子に限らず、室町期の絵巻享受全般にわたる問題でもある。

この点において、美術史研究の高岸輝氏の指摘が一つのヒントを与えてくれる⁽³¹⁾。高岸氏は「室町時代の政権と絵巻制作―『清水寺縁起絵巻』と足利義植の關係を中心に」という論考において、室町殿、すなわち歴代の室町將軍、初代尊氏・二代義詮・三代義満・四代義持・六代義教が、多くの絵巻を武家統領の權威の象徴として制作させ、コレクションしていたことを論じられている。筆者も、高岸氏が清涼寺本『融通念仏縁起絵巻』が足利義満の七回忌を追善して応永二十一年に制作されたものであろうとの論を参照して、「能《融通鞍馬》の制作動機」という小考で、世阿弥作の能《融通鞍馬》は『融通念仏縁起絵巻』に依って作られた能であり、義満の七回忌追善を契機として作成された能であると考察したことがある。

そこで、酒天童子に話を戻すと、武家の頭領である室町殿、すなわち足利將軍家は清和源氏の流れを汲む名門である。その清和源氏の武門の流れは多田満仲から始まるが、その満仲の長男で摂津源氏の祖である源頼光と、頼光と並び称された武勇の者である藤原保昌の二人が帝の勅を蒙って両大将となり、大江山の鬼神を退治して武威を示し国を安んじるという物語絵巻が、足利將軍家の求めで作られた可能性は多いに考えられよう⁽³³⁾。香取本の最後には、

御堂入道大相国、御参内有りて申されけるは、「上古より末代に至まで、代々朝敵を打ち靡くる輩多しと雖も、

斯かる希代の勝事に及ぶ事、先蹤承り及ばず。早速に勸賞行なはるべき」由、取り申されしかば、丹後守保昌、西夷大將軍に成りて、筑前国を給はる。摂津守頼光は東夷大將軍に成られて、陸奥国をぞ給はりける。

と頼光と保昌が東西の大將軍となる宣旨をいただき、領国を賜ったと語り納めているのである。將軍家の武威の歴史を語るのに相応しい物語と言えよう⁽³⁴⁾。

つまり、香取本の『大江山絵詞』は足利將軍のもとにあり、將軍家御用の觀世座の能の作者が、室町將軍の周辺でその絵巻を披見する機会を得て、制作された能が《大江山》であると推測されるのである。

〔注〕

(1) 《大江山》の謡本は『国書総目録』によると、別名の《酒天童子》も含めて四十一本が存するが、諸本間に大きな異同は認められない。ただし、四段目の「上ゲ歌」「いさくさけをのまふよく」の後に「爰は所も蓬生く。荒たる宿なりとも我たにすたかは御心安く思召せ」の詞章を有する系統と、持たない系統に大きく二分することができ、前者が古態を保っていると思われる。本稿に引用する本文は、前系統の謡い本の一本として上掛りの淵田虎頼等節付本（松井家一番綴じ本、永青文庫蔵）を用いる。なお、役名や節付けの表記は〈 〉に入れて示した。

(2) 古法眼本の引用本文と挿絵図版は『大日本史料』第九編之二十（一九九四年、東京大学出版会）所収のものを用いる。

(3) 御伽草子本の引用本文と挿絵図版は市古貞次編『御伽草子』（一九七二年、三弥井書店）に拠る。

(4) 古典文庫『日本史伝川柳狂句』第七冊（古典文庫、一九七五年）。なお、『日本史伝川柳狂句』に酒吞童子の狂句が載ることは、佐竹昭広氏『酒吞童子異聞』（平凡社選書55、一九七七年）で触れられている。

(5) 小松茂美編、続日本の絵巻26『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』（一九九三年、中央公論社）。

(6) 「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年）。

(7) 島津忠夫「大東急記念文庫蔵『大江山絵詞』をめぐる」（『国語国文』二〇〇五年十二月、後に島津忠夫著作集第十巻『物語』（二〇〇六年、和泉書院）に収録）。

(8) 菊地勇次郎「最澄と酒吞童子の物語」（『伝教大師研究』一九七三年、天台学会）、天野文雄「『酒天童子』考」（『能 研究と評論』八号、一九七九年十月）、榎原悟「『大江山絵詞』小解」（『続日本絵巻大成』十九、一九

八四年、中央公論社）、牧野和夫「叡山における諸領域の交点：酒吞童子譚」（『国語と国文学』六十七卷十一号、一九九〇年十一月）、徳江元正「作品研究「大江山」・「作品研究「大江山」（承前）」（『観世』一九九一年一月号）、辻田豪史「酒吞童子話変遷の一側面―登場人物の異同と頼光像の再編成―」（『国文学研究』第百三十六集、二〇〇二年三月）、斉藤研一「酒吞童子物語研究の可能性」（『中世文学研究は日本文化を解明できるか』笠間書院、二〇〇六年）。

(9) 『金沢市立図書館蔵謡言粗志―翻刻と校異―』下巻（一九九〇年、金沢市）。

(10) 佐成謙太郎『謡曲大観』第一巻（一九三〇年、明治書院）。

(11) (3) で引いた『酒吞童子異聞』。

(12) 続日本絵巻大成十九『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』（一九八四年、中央公論社）。

(13) 新日本古典文学大系41『古事談・続古事談』（二〇〇五年、岩波書店）。

(14) 萩谷朴「清少納言零落伝説の虚妄性と名誉恢復」（『古代文化』第三十二卷第四号）。

(15) 大日本古記録『御堂関白記』下（一九五四年、岩波書店）。

(16) 池田尚隆『御堂関白記』註釈（57）―寛仁元年三月三日～三月十五日条―（『古代文化』第三十三卷第八号）、山中裕編『御堂関白記全註釈 寛仁元年』（一九八五年、国書刊行会）。

(17) 国史大系12『扶桑略記』（一九九九、吉川弘文館）。

(18) 長谷川端「酒吞童子絵巻 翻刻・略解題」（『中京大学図書館学紀要』二十六、平成十七年五月）。

(19) 屋代本「平家物語」（貴重古典籍叢刊9、角川書店）。

(20) 《土蜘蛛》の引用本文は野坂家本「蛛」（金春八郎等節付三番綴謡本）に拠った。

(21) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第九(一九八一年、角川書店)。

(22) 《土蜘蛛》と違ったかたちで展開した頼光物の能に観世小次郎信光作の《羅生門》、またの名を《綱》がある。これは、《春雨が続く頃、源頼光の館では四天王をはじめ平井保昌などの家来があつまり酒宴をひらいていたところ、羅生門に鬼が出るという噂が話題にのぼり、その実否について渡辺綱と保昌との間で言い争いになり、綱は真実を確かめると言って席を立つ。羅生門に着いた綱は証拠の札を立てて去ろうとすると、鬼が現れ兜を掴む。綱は緒を切つて鬼の腕を切り落とした》という筋であり、ワキの綱を中心とした能で、シテの鬼は後場しか登場せず、しかも一言も発しないという大胆な構成になっている。冒頭に、頼光が「丹州大江山の鬼神を従へしよりこのかた」と述べるように、明らかに大江山鬼神退治の後日談として仕組まれていることが注目され、この後で頼光を囲んでの酒宴となり、羅生門に鬼が出るとの噂を巡って綱と保昌との口論になって、引つ込みが付かなくなった綱が羅生門に札を掲げに行き、そこで鬼と遭遇して腕を切るといように展開するのであるが、ここで綱の相手役として保昌が登場するのは、《大江山》を承けてのことと理解できよう。この話も強いて典拠をあげると『平家物語』の「剣の巻」になるが、「剣の巻」における綱の鬼の腕切りの話には保昌は登場せず、これも能《大江山》に続く連作物として作られた経緯が考えられようが、稿をあらためて論じた

い。

(23) 八寫幸子『寺務方諸廻請』紙背文書抄(上)〔北の丸―国立公文書館報―〕三十二号、一九九九年十月・同「応永三十四年演能記録」について〔『観世』二〇〇〇年八月〕。

(24) 表章『《観世流史》参究(その二十) 世阿弥出家直後の観世座―応永三十四年演能記録をめぐって―』〔『観世』二〇〇〇年十月〕。

(25) 拙稿「宇都宮二荒山神社蔵『造宮日記』における能楽記事の史料的意义」(『芸能史研究』一五七号、平成十四年)。

(26) 『丹後細川能番組』(宮津市教育委員会・中嶋利雄・松岡心平・表章『能楽研究』第八号、一九八三年三月)、拙稿「能《真名井原》制作の動機と背景——『丹後細川能番組』に見られる上演記録をめぐる——」(『伝承文化の展望』二〇〇三年、三弥井書店)。

(27) 本曲の謡い本の曲名表記は《大江山》と《酒天童子》の二種類がある。古くは応永三十四年の番組がそうであるように《酒天童子》が多いが、本稿では混乱を避けるために、特に断らない限り現在に通行している《大江山》を用いる。

(28) 『大正新脩大藏經』第76卷(一九三二年、大正新脩大藏經刊行会)。

(29) 『二帖御抄見聞』明応十年(一五〇二)の成立(『天台宗全書』9、一九三五～三七年、天台宗典編纂所)。

論文中の落合氏の注によると、「普光院(足利義教)」は「勝定院(義持)」の誤りであり、「花芳院慶憲」は「花王院証憲」が正しいとのことである。

(30) 落合博志「所見曲に関するいくつかの問題」(『能と狂言』創刊号、二〇〇三年四月)。

(31) 高岸輝「室町時代の政権と絵巻制作——『清水寺縁起絵巻』と足利義植の関係を中心に」(『中世文学研究は日本文化を解明できるか』笠間書院、二〇〇六年)。

(32) 拙稿「能《融通鞍馬》の制作動機」(月刊『能』京都観世会館、二〇〇七年六月)。

(33) そこで注目されるのが、伏見宮貞成親王の『看聞日記』紙背の物語目録の中に、「酒天童子物語一帖」とあることである。伏見宮家伝来、または貞成親王の所持本とも考えられるが、室町殿のコレクションを写したも

のとも考えられないだろうか。貞成親王が、実子である後花園天皇を介して將軍家所藏の絵巻を披見していることは『看聞日記』の記事からも知られるところである。それは称光天皇から後花園天皇に讓位された永享年間以降に多くなるが、永享以前にも何らかの方法で借り出し、絵巻を写していたことも考えられるのではないだろうか。

(34) 藤原保昌は藤原南家巨勢磨流に連なるが、『尊卑分脈』の系図によるとその妹に「源満仲妻、河内守頼信母」と注されている。清和源氏の系図では頼光の弟頼信の母は藤原致忠の女、または藤原元方の女とするが、保昌の妹を母とする説もあったようだ。とすると保昌は足利將軍家と直接繋がる河内源氏の祖、頼信の叔父であったことになり、頼光と保昌が両大将として描かれる起因が窺われよう。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

【図 1】古法眼本 〈『大日本史料』第九編之二十（1994 年、東京大学出版会）に収載の図版に拠る〉

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

【図 2】御伽文庫本 〈『御伽草子』（1972 年、三弥井書店）に拠る〉

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

【図 3】香取本 〈続日本の絵巻 26『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』
(1993 年、中央公論社) に拠る〉

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

【図 4】中京大学本 〈『中京大学図書館学紀要』26 (2005 年 5 月) に収載の
図版に拠る〉

正 誤 表

■ 75 ページ 8 行目

誤 (3) → 正 (4)